

大国主神とヨセフ

井 本 英 一

大国主神には多くの名がある。大^{オホ}ナムチノ神，大^{オホアナ}穴ムチノ神，葦原^{アノハラノコヲ}醜男神，^{ヤチホコ}八千矛神，^{クニタマ}ウツシ国魂神，大物主神などがそれである。

オホナムチは、オホアナムチの縮約形であるという。ムチは、『岩波古語辞典』によると、神や人を尊び親しんでいう語で、むつまじい対象であった（1254頁）。これら2つの名は、根^{カタス}の堅州国を訪問し、スサノヲノミコトの娘スセリビメと結婚したときの名で、地上に帰還したのちは、大国主となる。すると、大ナとは、大地と解することも可能となる。ナは古語「ナキ」のナで、土地のことである。大ナムチは、大地神の古語で、大国主神と同じ名であったと解することもできる。大地神の対偶神は、大地母神である。大ナムチノ神は、^{ヤノガミ}八十神のたくらみによって、灼熱の赤い石猪を抱かされ、殺されるが、御祖（ミオヤ）の母神の愛情によって蘇生する。大ナムチは、御祖の神の子であるので、二神は、母子神の関係にある。大ナムチが、母神の子であり、夫である時代が日本文化の古層にあったかも知れない。母あるいは妻である女神は、子あるいは夫の死を嘆いて、これを蘇生させる。このように解釈すれば、大ナムチは、イナンナ・ドゥムジ、イシュタル・タンムズ、キュベレ・アッティス、イシス・オシリス、アナーヒター・ミスラ（ミトラ）と同じ母子神の男神に相当することになる。さらには、嘆きの母マーテル・ドロローサ（マリア）と復活するイエスにも相当する。そうすると、大ナムチは、大穴ムチの縮約ではなく、独立したものである。

ヤコブの11番目の息子で、ヤコブとラケルとの間に生まれた長子であるヨセフは、兄たちの迫害を受けて、エジプトに奴隸として売られる。ヨセフは、主家の女主人とのあらぬ情事で訴えられ、投獄される。あるとき、ファラオは夢を見た。ヨセフは、牢からファラオの前に連れ出され、夢の解き明かしを命じられた。ヨセフは答えた。今から7年間、エジプトの国全土に大豊作が訪れる。しかし、その後7年間、飢饉がつづき、それは、国を亡ぼすほどのひどさである。そこで、豊作の7年間、産物の5分の1（普通の年は10分の1）を徴収し、保管しておく。そうすれば、7年間の飢饉を切り抜けることができる。ファラオは、ヨセフを自分に次ぐ地位につかせた（「創世記」41. 1－40）。飢饉が激しくなり、エジプトでもカナンでも、人々は苦しみあえいだ。人々は、穀物の代金として、銀を使い果たした。銀のあとは、家畜を穀物と代えたが、これも使い果たした。最後は、食糧と引き換えに、人々は農地を手放した。人々はファラオの奴隸になり、土地に種子を播いた。ヨセフはこのようにして、エジプト中の全ての農地をファラオのために買い上げた。ただし、祭司の農地だけは買い上げなかった（47. 13－22）。

大国主、大ナムチは、一国の主であったが、国譲りの後は引退し、天孫が、大国主が今まで治めていた世を治め、大国主は幽界の神事をつかさどった。大国主は、天孫に隷属したのではなく、自ら天孫に次ぐ地位についた。さらに、大国主は、のちに大黒天と音が通じるために同一視されるようになるが、七福神の大黒天は、左肩に大きな袋を背負い、右手には打ち出の小槌をもって、米俵の上に座る。いずれにしても、大国主は豊穰の神という特性をもっていた。ヨセフも、ファラオに次ぐ人物で、宰相であった。飢饉に備えて穀物を蓄えるのは、豊穰を表わしている。カナンからやってきた自分の兄弟たちに、穀物をもって帰らせる場面がある（第42章以下）。ヨセフの兄弟たちは、それぞれ、穀物を詰めた袋を背負ってカナンに帰る。大国主は、八十神に袋を背負わされて、とぼとぼとあとについて歩く。ヨセフが農民から農地を買い上げ、ファラオが、国の農地をわがものとしていった。ヨセフは、大土地所有者となったわけではないが、大国主と称してもおかしくない。『出

雲国風土記』意宇郡に、八束水臣津野命ヤノカミズオミノヌノミコトの国引き神話が見られる。この神の属性は、水の増大である。この点で、増大を表わすヨセフという語と等しい。

大穴ムチは、字のとおり、穴に関係がある。アナを感動詞と見る説があるが、不自然である。穴は、横穴であれ堅穴や井戸であれ、それは、この世とあの世の境界で、入口であり出口であった。大穴ムチとは、このような境界を象徴する神であった。国譲りに際して、大国主は、幽界の神事を管掌することになるが、素戔鳴尊スサノヲの第5世あるいは第6世の孫といわれる（『日本書紀』神代）。スサノヲは、高天原から中つ国を経て、根の堅州国に至りその支配者となる。堅州国は、黄泉の国ではないが、そこを訪問して帰還することは、一種のよみがえりと考えられた。

大ナムチは、八十神らの迫害を受けて2度も殺される。最後に、大屋毘古オホヤビコ神のいうままに、根の堅州国にスサノヲを訪ねる。その娘スセリビメは大ナムチを見て、まぐわしいし、父神に、立派な神が来たことを告げた。スサノヲは、この神は、アシハラシコヲノ命という神だといって、早速、蛇の室むろに入れた。スセリビメは、夫に蛇の領布ひれとうい布を授けたので、蛇の害を逃れ、室を出ることができた。翌夜は、呉公むかでと蜂の室に入れられたが、それぞれの領布を振って、そこから出た。スサノヲは、広い野原かぶらやに鎗矢を射込んで、その矢を拾いに行かせた。大ナムチが野原に入ると、スサノヲは火を放って、周囲から野を焼いた。出口が見つからず、困っていると、鼠が出てきて、内は空洞になっていて、外はすぼまっているといったので、そこを踏むと、穴に落ちた。その間に火は上を通り過ぎた。さきの鼠が、鎗矢をくわえて出てきて、大ナムチに奉った。彼は鎗矢をスサノヲに渡し、スサノヲの宝物である生大刀いくたち、生弓矢のりこと、天の詔琴ヨモソヒラサカを盗んで、黄泉比良坂を越えて出雲に帰った。

大穴ムチの穴というのは、鼠の教えた穴のことでもあり、黄泉比良坂のトンネルでもある。穴に入り、穴から抜け出て、大穴ムチは大国主となった。「創世記」のヨセフ伝では、次のようになっている。ヤコブは、自分が愛したラケルが、やっとのことで生んだヨセフが自分の年寄ってからの子なので、兄弟たちの中で、いちばん愛した。そのため、兄弟たちはヨセフを憎み、嫉

妬した。ヨセフは、あるとき夢を見た。それらの夢は、11人の兄弟たちや両親が、彼の周りにひれ伏すと解釈されるものであった。兄たちは、この夢の話聞いてヨセフを妬んだ。あるとき、ヤコブは、遊牧に出かけた兄たちの所へ、ヨセフを使いに出した。ヨセフは兄たちを探して野をさまよった。兄たちは、ヨセフがくるのを見て、彼を殺そうと考え、彼の上衣を剥ぎとり、彼を野原にある穴に投げ込んだ。そこに隊商が通りかかり、ヨセフを穴から引き上げ、銀20枚でイシマエル人に売った。イシマエル人は、ヨセフをエジプトに連れてゆき、ポティファルというファラオの侍従長に売った（37. 1－36）。

ヨセフは、ポティファルに仕えたが、ヤハウエがいつもヨセフと共にいたので、ヨセフのすることは、全て上首尾であった。主人はヨセフを信頼し、全ての財産を彼に委せた。ヨセフは、顔も体つきも美しかった。主人の妻は、ヨセフに情事を迫った。ヨセフは拒否して彼女から逃れたが、彼女は彼の衣服（腰布）を引きちぎった。彼女は叫んでいった。あのヨセフが、私と寝ようとしてやってきた。私は大声を立てたので、彼は衣服を残して逃げていった、と。主人のポティファルは、これを聞いて怒り、ヨセフを王の囚人がつながれている牢獄に入れた（39. 1－23）。

ヨセフは兄たちの迫害を受け穴に落とされる。エジプトは、カナンから見ると異界で、この穴を経て、エジプトに入っていたのである。ヨセフは兄たちに殺されそうになるが、命を失うことはなかった。大ナムチと同じように、野原で探すモチーフが用いられている。野原は境界であり、極楽エリュシオンであり、死者の国であった。大ナムチは、スサノヲの根の国から中つ国に戻り、ヨセフは、カナンから異界エジプトに移った。侍従長ポティファルはスサノヲに当る。ポティファルの妻は、ヨセフの衣服の布をかざして、ヨセフに罪をかぶせようとする。布は、スセリビメが大ナムチに与えた領布で、蛇の室や呉公や蜂の室は、ヨセフが入れられたファラオの牢獄である。オホナムチは、葦原のシコヲであるが、ヨセフは容貌が美しい。二人は相反する容貌の主であるが、もとは、大ムナチも男前であったにちがいない。ヨ

セフは、ファラオの命で、オン（ヘリオポリス）の祭司ポティフェラの娘アセナテと結婚する（45. 41）。侍従長ポティファルと同じ名で、恐らく、伝承の途中で、二人の独立した人格に発展したのであろう。ポティフェラは、スサノヲに当り、カナンから見ると異界であったエジプトのヘリオポリスの祭司であった。その娘アセナテは、スセリビメに当る。アセナテも、異教、異宗教の女であった。

ヨセフの成功譚は、のちに、ペルシアで形を変えて語られた。ペルシア帝国のアハシュエロス（クセルクセス）王は、スーサに住むユダヤ人の娘エステルを皇后に選んだ。エステルの伯父モルデカイは、王を暗殺せんとする陰謀から王の命を救う。当時、王はハマンなる者を、王に次ぐ地位につけたが、ハマンはモルデカイを憎み、帝国内のユダヤ人を全部殺そうとする。エステルは、モルデカイの指示どおりにして、ハマンを挫く。モルデカイは、ハマンの地位に拔擢された（「エステル書」）。モルデカイはヨセフや大ナムチに当る。彼は姪エステルの助力で、前任者ハマンを失脚させ、王に次ぐ地位を手に入れる。エステルは、ヨセフと同母（ラケル）の弟であるベニヤミンの氏族の女であるが、スセリビメに相当し、モルデカイを助けて宰相（大国主）の地位につける。

ヤコブとラケルの間には、2人の子がいた。神は姉レアに7人の子を授けたが、こんどはラケルの願いを聞き入れ、その胎を開いた。彼女は、男の子を生んで、その名をヨセフと名づけた。さらに、ラケルは、ベニヤミンを生んだ。ヨセフは、異教の女であるエジプト人アセナテとの間に、マナセとエフライムの2人をもうけた。国譲りの場面に出てくる大国主には、^{ユトノロヌン}事代主神と^{タケミナカタ}建御名方神の2柱の子がいる。『日本書紀』によると大国主の子は、この2柱だけではなく、181柱いた（神代上、第八段、一書第六）。これらの二人兄弟は、そのうちのどちらかが成功するが、他は舞台から消えてゆく。ラケルの子の場合、弟のベニヤミンは、舞台から完全に消えるわけではないが、ヨセフが成功する。ヨセフの子の場合、ヤコブの家を継いだエフライムだけが舞台に残る。大国主の子の場合、事代主は、宮中の八神殿の一神としても

残っている。異母弟の建御名方は、高天原から派遣された使者と力競べをして敗れ、命乞いをして服従する。大国主には、もう一つ、^{オホモノスノ}大物主神という名がある。大は、大国主、大ナムチ、大穴ムチに共通した美称で、物主にその特性がある。物とは、霊魂であると同時に具体的な物で、国主と物主は、結局は、大地と豊穰の神のことである。ヨセフという名前は、ヘブライ語ヤーサープ（加える）のゆるい命令形（ジャンヴ）ヨーサープに由来し、彼（神）がさらにつけ加えんことをの意である。加える対象は、息子であり、穀物であり、国土である。ヨセフは大国主である。大ナムチ、大国主には、医王としての特性がある。稲羽の白兔がワニを騙したために衣服を剥がれ、苦しんでいるとき、八十神たちは乱暴な治療法を指示したので、益々苦しんだ。大国主は、白兔に、体を真水で洗い、蒲の花を集め、それを敷いて、その上に転がれば、もとの体になると教えた。大国主の療法は、道教のそれだという意見があるが、必ずしも外来の療法と考えなくてもよい。日本では、古く、出産の出血を止めるために、蒲の穂を膣に入れたものである（小野清美『アンネナプキンの社会史』JICC出版局、1992年、70頁）。花粉に止血力があることが知られていた証拠である。

八十神は、大ナムチに袋を背負わせ、^{イナバ}因幡の^{ヤガミヒメ}八神比売に求婚に行くが、いずれの神も姫に拒否される。姫は、大ナムチと結婚したいという。そこで、八十神は大ナムチを迫害し、焼けた石猪を抱かせて殺すわけであるが、母神が高天原に上って相談したところ、キサガヒ（赤貝）姫とウムギ（蛤）姫を送り降して、大ナムチを蘇生させた。貝殻の粉と、貝汁と母乳を混ぜたもので治したのである。ヨセフの父ヤコブではないが、スペインの守護聖人である聖ヤコブ（サンティアゴ、キリスト教の聖ジェームズ、英語ジェームズは、ラテン語ヤコブスから派生した）を祀るスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼者は、少なくとも12世紀からは、胸に帆立て貝を吊した。帆立て貝は、護符として巡礼者の胸に掛けられ、治癒力を発揮した。施療院には、この貝が目印になっていた。巡礼者が道中で死んだ場合、貝殻で飾った衣服をまとったまま埋葬された。帆立て貝は、女陰であり、母胎でもあつ

た（アルフォンス・デュプロン編著・田辺保翻訳監修『サンティアゴ巡礼の世界』原書房，1992，343－354頁，ピエール・バレ，ジャン・ノエル・ギュルガン著・五十嵐ミドリ訳『巡礼の道 星の道』平凡社，1986，159－160）。大ナムチの場合は，母神の願いで，2柱の貝の女神が治療して蘇生させる。赤貝と蛤は，さかのぼれば，やはり女陰になるであろう。

ヨセフの場合は，キリスト教のヤコブ（ジェームズ）の貝であるが，大ナムチの場合は，母神の貝になっている。ユダヤ教のヤコブには，貝の伝承はないが，民間伝承でキリスト教に伝えられて復活したのではないと思われる。ヨセフも治療者としては伝えられていないが，自身が王の牢に投獄されていたとき，王の給仕長と料理長が入牢していた。ヨセフは，2人の見た夢を解釈し，給仕長は再びファラオに仕えるようになるが，料理長は，首を吊られるだろうと予言した。3日あと，2人はファラオの誕生日に出獄し，ヨセフの予言どおりの運命となった（40. 1－23）そのあとで，ヨセフは，ファラオの夢を解き，エジプトを大飢饉から救う（41. 1－56）。ヨセフは医者ではないが，生命の救出者である。ヨセフはこのあと，自分の故郷カナンの飢饉を救う。

インド神話の聖鳥で，鳥類の王である巨鳥ガルダは，翼が金色であるので，こんじちょう金翅鳥と漢訳される。ガルダは，ヒンズー教，仏教の拡がりと共に，アジアの各地に伝わり，その地の基層文化の中に入っていた。モンゴルの伝承にもガルダが現れる。昔，一人の王がいた。王には9人の娘があった。上の8人の娘は，立派な夫を持っていたが，末娘は見栄えのしない禿げ頭の若者と結婚し，あばらやに住んでいた。ところで，王の馬群が，毎夜仔馬を生んだが生まれ落ちるや，すぐいなくなるという事件がつづいた。8人の婿が順に見張りをしたが，犯人を見つけることができなかった。王みずからも見張りについたが，やはりだめだった。末婿が，眠らずに見張りをしていると，牝馬が仔馬を生んだ。すると，巨大なガルダが飛来して仔馬を奪って飛び去った。婿は，弓に矢をつがえて，ガルダを射たところ，わずかにガルダの尾羽と仔馬の尾が落ちてきた。彼は，ガルダの尾羽と仔馬の尾を箱にしまってお

くように妻にいった。

その後も、仔馬はいなくなりつづけた。王は8人の婿に、馬盗人を捕らえ、馬群を連れもどせと命じた。末婿も熱心に参加を望んだので、王は不承不承、駄馬に粗末な鞍をつけて与えた。末婿は、この馬に乗って出かけたものの、途中で死んだと皆に思わせ、良馬に乗りかえて目的を達しようとした。妻にだけは、このことを打ち明けておいた。策略どおり、末婿は死んだと思われ、皆の笑いものになった。末娘は、はじめて仔馬の尾とガルダの尾羽を王に見せたので、王は婿の活動を知り驚いた。

さて、8人の婿たちは、途中でだめになり、先に進めなくなった。末婿は平気で旅をつづけ、ガルダの住処に行きつき、ガルダを射殺し、99頭の馬を連れて帰った。途中、8人の婿たちに出会い、彼らも同行させた。しかし、婿たちは末婿をねたみ、彼を殺すために深い穴に落とした。8人の婿たちは、帰ろうとしたが馬群が散りぢりになってしまった。末婿は愛馬に助けられ、99頭の良馬を集め、帰途を急いだ。末婿ははじめて本来の立派な風采を現わし、王の没後、その国を引き継ぐことになった（原山煌『モンゴルの神話・伝説』東方書店、1995年、＜モンゴルの伝承に現れたガルダ その二＞224－227頁）。

末婿は、大ナムチやヨセフに相当する。娘はスセリビメや祭司ポティフェラの娘アセナテに相当する。8人の娘婿は、八十神であり、ヨセフの兄たちである。8人の娘たちは、良い婿と結婚するが、末娘は貧相な禿頭の男と結婚するという筋は、大ナムチが八上姫の愛を射止める話とは逆になっている。若者は禿の醜男であるが、最後は、本来の美男となる。大ナムチやヨセフの容貌と関係があるようである。8人の婿たちが、末婿を殺そうとして、穴に投げ込むと話は、ヨセフの話と同じである。馬群を連れて帰るイメージは、シリアからエジプトに向かう隊商であるが、若者は奴隸として売られるのではなく、勝利者として、王の都に帰る。それは、奴隸ヨセフののちの姿である。

ヨセフがエジプトの侍従長の家に奴隸に売られ、美男であったために、侍

従長の妻に誘惑されるが、それに応じなかったので、無実であるにも拘らず投獄される話柄は、ここでは見られないが、＜モンゴルの伝説に現れたガルダ その一＞には、このモチーフが見られる。一人の年老いた王がいた。その妃は、残酷な性格であった。妃は、王の若い馬番に心を寄せ、誘惑しようとしたが、若者は心を動かさなかった。妃は、王をそそのかして、若者に試練を課すが、若者は試練の旅に出て大蛇に呑み込まれることになっていたガルダの娘を救ってやる。邪悪な王妃は、2匹の怪物に引き裂かれて死んでしまい、若者は、母親のガルダの恩返しを受けて、王に代わって王になり、幸福に暮らした（前掲書、221－223頁）。王妃が課した試練は、ヨセフの入牢であり、スサノヲの課した、大ナムチの蛇や、蜂・呉公の室への入室である。侍従長の妻が、ヨセフの衣服を引き裂いたモチーフや、スセリビメが大ナムチに与えた領布（布の裂れ）のモチーフは、王妃が引き裂かれた話に変わっている。この話では、若者は、スサノヲが八岐大蛇を退治したように、娘を食う大蛇を退治する。

大ナムチは、ギリシア神話の地下界の王であるプルートンとなったスサノヲの許から去るとき、汝は大国主となり、ウツシ国魂神となって、スセリビメを正妻として、宇迦^{ウカ}の山のふもとに、太い宮柱を深く堀り立て、千木を空高くそびやかした宮殿に住めといわれた。大ナムチは、冥界に降るまでは、葦原の中つ国で醜男と呼ばれたが、黄泉の国から帰還してからは、ウツシ（現）国魂となった。現しというのは、黄泉、冥界から現実の世界に帰還した状態をいうのであって、美しいという意味はないが、ウツという共通語をもつ。再生した、この世的なみずみずしい神となったのである。ヨセフは、王の夢を解いて牢から出され、出世して王に次ぐ地位である宰相になる。ヨセフは、奴隷のときから美しく、そのために災いを招いて入獄するので、醜男ではなかった。この点、大ナムチが醜男であったのと相異なる。醜男は、醜女と相對する語であるので、剛勇であると同時に、その容姿は美しくなかったといえそうである。大ナムチもヨセフも、異界を訪問してよみがえったのである。

ヨセフは、兄たちの嫉妬を買って、深い穴（井戸）に投げ込まれるが、長兄ルベンが、ヨセフを殺してはならないと助言したので、奴隷に売られて、エジプトに連れてゆかれる。堅穴であれ、横穴であれ、それは、この世とあの世の境界にある洞穴である。儀礼としてあの世に渡る者は、生きたまま冥界降りをするので、殺してはならなかった。高野山の荊萱堂、生駒山地の信貴山寺、信濃の善光寺には、暗い道を手探りで進む胎内くぐりの場がある。これらの暗黒の通路は、臨死体験者が共通して証言する、光輝に満ちた花園に入る前に通る、真っ暗なトンネルと同じもので、東晋の陶淵明の『桃花源記』にも同類が見られる。武陵の漁夫が道に迷い、川を遡って、とある洞穴の中に入る。真っ暗な洞穴を出ると、そこは美しい桃の花の咲き乱れる桃林がある。その奥には、秦の乱を避けた者たちの子孫が住んでいた。漁夫は歓待されてそこを辞し、故郷に帰り、太守にこのことを報告する。太守は人をつけて漁夫を桃源に送るが、二度と発見することはできなかった。このような、異界訪問譚には、堅穴あるいは横穴の洞穴はつきものである。

大ナムチが、スセリビメと結婚するに際して、スサノヲによって課せられた試練は、蛇の室や蜂の室に入って、そこから無事に出てくることであった。室はムロと読み、洞穴のように、一つの出入口だけがあり、窓が全くない建造物のことである。窟も同じで、入口の戸を閉めると、全くの暗黒になる。このような暗い穴から明るい外界に出ることが、通過儀礼として用いられたのである。このような室あるいは窟は、人工の建造物である以前は、山腹に掘った岩窟であった。『万葉集』卷三に、「大汝少彦名のいましけむ志都オホナムチスクナヒコナの石室いはやは幾代経ぬらむ」（355）の歌が収録されている。当時、大ナムチは、石窟の中にいるという伝承があったことは明らかで、大汝の他我である少彦名も、同じように洞穴の中にいたことになる。

大ナムチというよりは、大穴ムチは、スサノヲの試練を受けて、蛇の室や蜂・呉公の室に入れられるが、領布のお陰でことなきをえた。そのあと、スサノヲが射た矢を探し求めて野に入ったところ、スサノヲに火を放たれたので、鼠の教えるまま、地下の穴に避難し、災害をまぬがれた。この穴も、入

口しかない窟（ムロ）で、再生儀礼の装置であった。このたて穴は、ヨセフが落とされた穴と同じものであることは先述した。大国主伝説が成立するまで、いろいろな伝承があったと考えられる。これらの伝承のうち、窟（室）と豎穴のモチーフが、ここに用いられたのであろう。試練のあと、大ナムチあるいは大穴ムチは、大国主となる。いっぽう、エジプトのヨセフは、窟に相当する牢獄にいたが、ファラオの夢を解いて出獄し、ファラオに次ぐ地位につく。ファラオは、オシリスが支配する死の世界といつも深い関係をもつうつし身の王であるが、日本神話では、根の国に追放され、その王であるプルトンとなったスサノヲにあたる。イランの始原の王イマ（ヤマ）は、インドの終末の王ヤマ（閻魔）で、この世の統治者はあの世の統治者となる（岡田明憲『死後の世界』講談社、1992年、26頁）。ファラオもスサノヲも、死者の王オシリスで、その国を訪れる者をよみがえらせたのであった。

大ナムチは、八十神が、山の上から赤い猪を追い落とすから、下で待ち受けて捕えよ。もし捕えなかったら汝を殺すといったので、下で待ち受けていた。すると、八十神は、猪に似た大石をまっ赤に焼いてころがり落とした。大ナムチは、その石猪を捕えようとして、焼かれて死んだ。死んだ大ナムチが、母神の力で再生したのは先述した。この神話は、台湾を中心とした地方の葬制としての石抱きを語ったものであると解釈する説がある。死人の霊が石に憑りついて、やがてまた生き返るという信仰から、死人を大きな石に結びつけて葬り、速やかな再生・復活を願う、石の信仰に基づく実修の神活化したものだという（喜多路「海より来る神—モノとしての神」『東アジアの古代文化』39号、大和書房、1984年、104頁；松村武雄『日本神話の研究』第3巻、培風館、1955年、320－323頁）。エジプトのヨセフには、石を抱くモチーフはないが、ヨセフの父ヤコブには、それがある。大ナムチが死んだとき、貝の粉と汁で治療すると生き返った話は、先述したように、ヤコブ圏に属する話である。その直前の、大ナムチの死の話も、ヤコブ圏に属するのは当然であろう。

ヤコブは、父イサクから、カナン人の間から妻を迎えてはならない。パダ

ン・アラムにいて、伯父の娘たちの間から妻を選ぶように命じられ、母の兄ラバシを訪ねて、パダン・アラムの地に向かって旅立った。ヤコブは、故郷のベエル・シェバを立てハラン（パダン）に向かった。ある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで夜を過ごすことにした。ヤコブは、その場所にあった石を枕にして横たわった。彼は夢の中で、天まで達する梯子を、天使たちが昇り降りするのを見た。主が傍らに立って祝福し、ヤコブを守ることを約束する。ヤコブは夢から覚め、枕にしていた石を立て、先端に油を注いで、その場所をベテル（神の家）と名づけた（「創世記」28. 1－10）。ヤコブはさらに旅をつづけた。ある野原にくと、大きな石で蓋をした井戸があった。人々が飼う羊の群れが全部集まると、その石を転がして、羊の群に水を飲ませ、また石を元の所に戻しておくことになっていた。最後にやってきたのが、伯父の娘ラケルであった。ヤコブは、井戸の口の石を転がして、ラケルが連れてきた、伯父ラバシの羊の群れに水を飲ませた。ヤコブはラケルに近づき、口づけをして、声を上げて泣いた。ヤコブはラケルに、自分は彼女の父の甥であることを知らせた。ラケルは、走って行って父に知らせた（29. 1－12）。中近東の枕は、日本や欧米の枕とは形が違ふ。長さ1メートル、直径20センチほどの、外がわをじゅうたんで巻き、内部には棉花を詰めたもので、昼間は脇息として使用する。日本の場合は、脇息と枕は、同じ木製であっても、形も用途も別であるが、中近東のものは、両用を兼ねる。ヤコブは、このような形をした石を探して、それに凭れかかって夢を見たのである。それは、柱としても認識されていたので、神殿の宮柱、大黒柱にもなりえた。石を抱くというのは、ここでは、神の世界と交信するというシャマニズムの習俗を示唆する。ヤコブが、井戸の蓋にしてあった大きな石を転がしたとあるのも、石を抱く行為である。井戸は、ヨセフの堅穴と同じもので、この世とあの世の境界と見なされた。その蓋をとりのぞいて、羊に水を飲ませたのであるが、石を抱えて転がすことは、カミの世界との交信を始めることであった。それは、羊の群にとっては、生命の水を飲んでよみがえることであり、人間にとっても、生命の水によって再生することであった。ヤ

コブは、石を抱いて寝たり、井戸の蓋の石を転がすことによって、石に宿る霊力を自分の身体に移したのであろう。族長時代には、まだ完全な一神教になっておらず、このような古い習俗の残滓が見られた。死体を納棺したあと、頭部の傍らに、拳大の石を添える習慣は、石を抱く習慣の変異体である。人間は、死ぬと石に帰り、その石から生まれ変わるという伝承が広く見られるが、この場合は、死体が石に抱かれるといってもよい。

天下をつくった大穴ムチの子アヂスキタカヒコネは、夜となく昼となく泣いたので、高い家屋を建て、その上に座らせ、高い梯子を立て、昇り降りして育てた（『出雲国風土記』神門郡，高岸郷）。この中に、ヤコブの夢の中の天地を結ぶ梯子と、そこを昇り降りする天使と、枕にした石を立てて神の家をつくったモチーフが見られる。高い家屋は、高屋と書かれていて、出雲大社のような、長大な階段を昇る巨大な神殿を指している。高屋の屋を厓（崖）の誤字として、地名と対応させるべきだという意見がある（吉野裕訳『風土記』吉野裕訳，平凡社，1969年，223頁の注116）。しかし、比較の立場からすれば、必ずしもその必要はない。『出雲国風土記』仁多郡，三津郷には、次のようにいう。アヂスキタカヒコネは、あごのひげが八握（握り拳8つ分）になっても、夜昼となく泣いていた。ことばも出なかった。大穴ムチは、夢占らをしたところ、その夜の夢に、アヂスキタカヒコネが口をきくようになったのを見た。『尾張国風土記』逸文 ^{アヅラ}吾縵郷では、垂仁天皇の皇子ホムツワケは、7歳になっても口をきかなかったが、皇后の夢にアマノミカツ姫が現れ、自分を祭ってくれば、皇子はすぐに口をきくようになるという神託をくださった。『古事記』では、垂仁天皇の御子ホムチワケはひげが握り拳8つ分伸びても、ものがいえなかったが、夢のお告げがあり、2人の王子に副えて、出雲の大神を拝ましめたところ、御子は口をきくようになった。『記・紀』神話によると、大ナムチの義父であるスサノヲは、ひげが握り拳8つ分、胸の前に伸びるまで、泣きつづけたので、青山は枯れ山となり、河川はみな涸れてしまった。そこで イザナギは、スサノヲを根の国に追放した。

アヂスキタカヒコネ、ホムチワケ、スサノヲは、みな出雲の大ナムチと何

らかの関係がある。大ナムチは、上来考察してきたように、この世とあの世を往来する神である。口がきけない者が、この神に詣でると、みな、口がきけるようになる。口をきかないのは、物忌みの状態にあると考えられる。7歳になるまで口をきかなかったというのは、7歳のときに行った通過儀礼の直前まで、物忌みして沈黙を守っていたことを指している。古代ギリシアを始めとして、隣国の韓国でも、古くは婚礼では、妻は一語も発することはなかった。初夜を過ごしてから、妻は口を開いた。アヂスキタカヒコネやスサノヲは、八握のひげを伸ばし放題に生やしていたというが、これも物忌みの状態にあった証拠である。この場合は、成年に達していることを物語るのに、それに見合った成年式のような通過儀礼がその裏にあることが考えられる。これらの儀礼の参加者は、一方では、昼となく夜となく泣きわめいていた。再生儀礼における、新生児としての誕生とその産声を表わしたのかも知れない。そうだとすれば、口をきかなかったというのは、母胎の中にいる胎児の状態をいうことになる。ヤコブは、初めていとこのラケルを見たとき、ラケルに口づけして、声を上げて泣いた。また、ヨセフは、自分を迫害した兄弟たちが、エジプトに穀物を調達にきたとき、自分の素姓を明かすが、このとき、ヨセフは、兄弟たちに口づけし、大声を出して泣いたので、他の部屋にいたエジプト人がその泣き声を聞きつけるほどであった（45. 1－28）。ヨセフは、父ヤコブに会いに、ゴシェンに行った。ヨセフは、父を見るなり、父の首に抱きつき、しばらく泣きつづけた（46. 28－30）。J. G. フレイザーは、未開社会では、久し振りに会った人々は、大声で泣く習慣があるといい、その例をいくつか挙げている（『旧約聖書のフォークロア』江河、秋山他訳、太陽社、1976年、300－307頁）。フレイザーの説明は、人倫の問題に帰結する。ヨセフやヤコブの号泣は、肉親との久し振りの邂逅によるものとも考えることもできるが、葬儀における参加者や泣き女による号泣と同じく、境界における号泣で、分娩時に妊婦があげる叫びや、新生児の産声や、臨終の人があげる呼吸や叫び声も同じものと考えられる。これらの音声は、境界で発せられるもので、人倫というよりは、生理的なもので、それが儀礼とし

ての境界の音とされるようになったのであろう。

このような成人式に類する儀礼では、2度の儀礼的な死が繰り返され、人は成人した時代があったのであろう。あるいは、儀礼的な死は、1度だけしか行わない文化もあったのであろう。ヨセフは、兄たちによって井戸に投げ込まれ、エジプトに奴隷に売られて、無実の罪をこうむって牢に入れられた。儀礼的には、2度の死を経ている。大ナムチは、根の国を訪問して、スセリビメと結婚する前に、八十神に猪に似た焼け石を抱かせられ、殺されるが、母神の愛情で蘇生する。八十神はさらに、大ナムチを山に連れてゆき、大木を切り倒し、楔を打ち込んで、その割れ目に大ナムチを入らせ、楔を抜いて、殺してしまった。母神は、大ナムチを探し出し、木を裂いて引き出して、蘇生させた。2度の儀礼的な死のあと、ヨセフは宰相となり、大ナムチは大国主となった。大ナムチは、さらに、蛇や呉公・蜂の室に入れられたり、野火に攻められ、鼠に教えられた穴に入る。これも、儀礼的な死を2度繰り返すことを物語る。

大国主神の神話の中にはエジプトのヨセフの神話に用いられたいくつかのモチーフが用いられている。筆者の意見では、二つの神話の類似は、単なる構造上のモチーフの類似ではなく、両者の中間にあった、恐らくは、中央アジアよりは西寄りの古代文化がもった集合的記憶が東西に分派した結果である。